令和７年１月７日（火）埼玉新聞第２部（別刷り）

「2025 新春インタビュー　埼玉この人に聞く」

AIで省人化養豚目指す

㈱セキネ

代表取締役

篠崎　壮登氏

原材料や燃料費の高騰、円安、人材不足などに加え、アジア地域をはじめ世界で政情不安が増してきている。「中小企業にとって今年は、昨年にもまして難しい舵取りを強いられる年になる」と気を引き締める。

同社が身を置く養豚業界は飼料高騰や物価高に直面している。特に輸入の依存度が高い飼料は生産原価の7割近くを占め、残りの3割で人件費、水道光熱費、設備の償却費用などを賄わなければならない。畜舎の建設費もこの10年で1・5倍に上がった。養豚家はこれまで以上に不安を募らせているという。

同社は1940（昭和15）年、農業資材販売店として創業。その後、養豚関連設備の製造販売を中核事業に据え、養豚家へのサポートに尽力してきた。61年には日本初の鉄骨豚舎を設計するとともに、給水器や給餌器など開発して、多頭飼育の基礎を作った。畜産先進国のドイツで学び、日本の養豚事業に豊富な知識と技術で寄り添い続けて、「養豚家あるところにセキネあり」との厚い信頼を得ている。

カーボンニュートラルと循環型社会形成に向けて、2017年から家畜排せつ用いたバイオマス発電を地元・深谷市の養豚家と共同で始めた。発酵によりできるメタンなどのバイオガスを燃料にガスエンジンを回して電力を生み出し、残った固形物は堆肥として近隣農家に還元している。現在3基が稼働し、今年は新たに1基を稼働させる準備を進めている。

また、養豚の担い手が少なくなる中、生産性を大幅に向上させるAIやIoTを活用した省人化システムの開発にも力を注いでいる。重要設備である糞尿分離システムに遠隔サポート機能を付加し、現場に出向かなくても稼働状況を把握できるようにして、時間と労力の大幅削減を図る。AI機能付きのカメラを使い、飼料の摂取量や活動量、体調などの重要情報を自動取集・管理するシステムの実験も最終段階に入っており、今年中に正式リリースする予定だ。

「創造、実践、誠実をモットーに、業界のパイオニアメーカーとしてこれからも国内の畜産業に貢献していきたい」と、意欲を燃やす。

セキネ
株式会社セキネ

〒366-8567
深谷市田所町 15-1
TEL　048-572-5111
FAX　048-573-1116
https://www.sekine-net.jp/